学内広報

2026.5.25 no.1606

硬式野球部が春季リーグの対法政大学2回戦に勝利し勝ち点を獲得（5月10日）

2017年秋季
以来の勝ち点!

→p.11

今年度、東大の組織はどう変わった?

桑原昌宏CRO（最高リスク責任者）に聞く

大江健三郎文庫に「新作」が登場

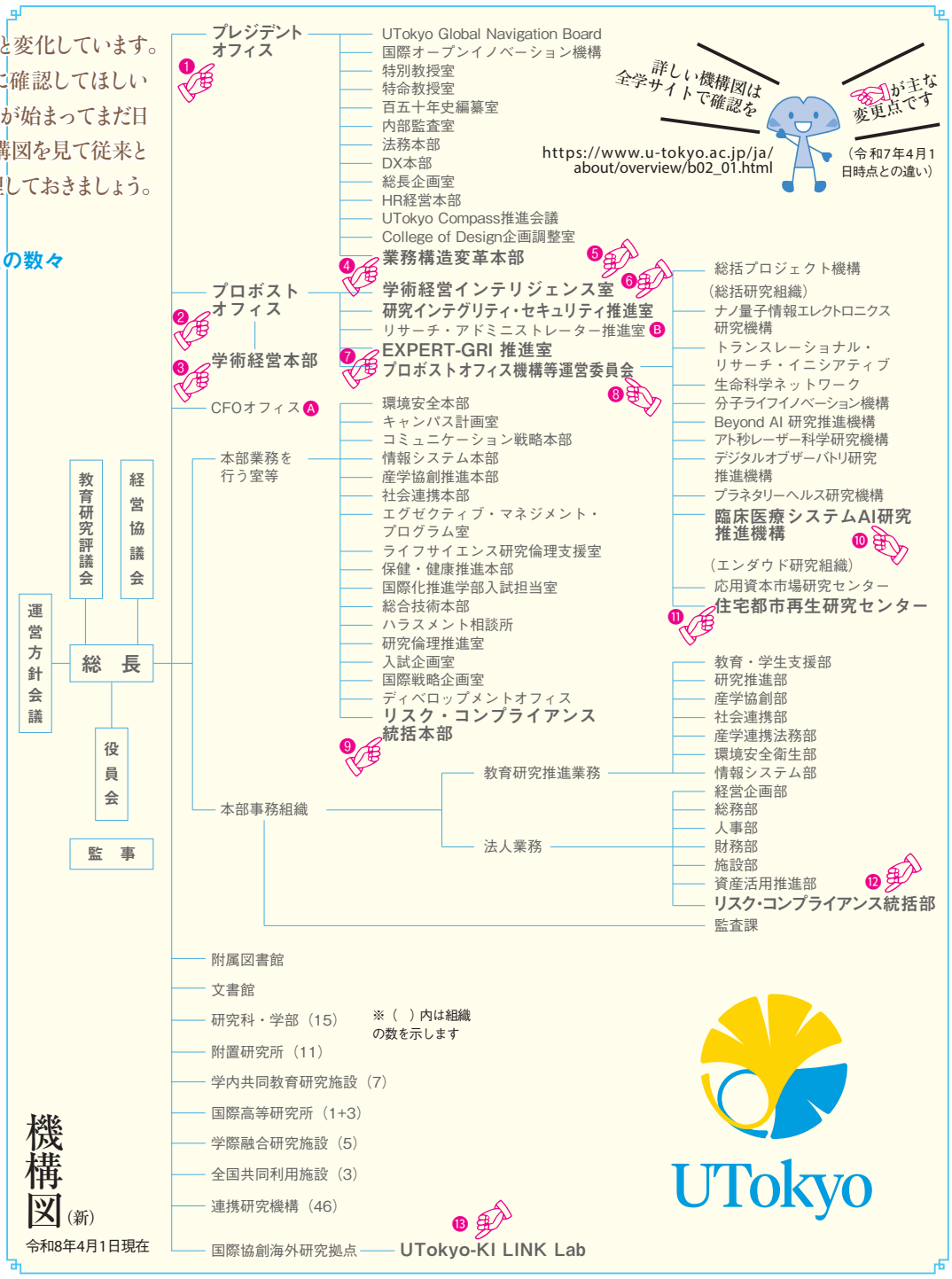
キャンパスウェルビーイングってナンデスカ?

UTokyo 150

令和8年度(2026年度)、東大の組織はどう変わった?

最新の機構図を見て変更点を確認しよう

大学の組織体制は刻々と変化しています。そこで教職員の皆さんに確認してほしいのが、機構図。新年度が始まってまだ日が浅いいま、最新の機構図を見て従来との違いをあらためて整理しておきましょう。



改革の姿を映す変更点の数々

❶総長の職責遂行を助けるための機関(総長室からの改組)。事務は本部経営戦略課が担当。 ❷プロボスト(最高教学責任者=**相原博昭**)の職務遂行を助けるための機関。プロボスト、2人のシニアバイスプロボスト(教育=**森山工**、研究=**玄田有史**)、3人のバイスプロボスト(教育=**大越慎一**、研究=**岸利治**、学術経営=**坂田一郎**)が配置され、事務は本部総務課が担当します。 ❸教育研究の高度化と持続的発展に資するために設置された、プロボスト直属の機関(本部長=**相原博昭**)。教育研究に係る全学的な資源配分に関する戦略の立案・実施、重点投資分野の選定や分野横断型先端融合研究の開拓、国際統合研究基盤(GRI※)の運営を担います。 Ⓐ本部業務を行う室等から基本組織規則により直接規定される機関に。 ❹教育研究活動の活性化を図り財務状況の改善を実現するため、事務系職員が携わる業務のあり方等の変革に係る業務を実施する機関(本部長=**菅野暁**)。 ❺将来性のある研究課題や研究者の情報の高度な収集・分析を担うため、IRデータ室から改組された機関(室長=**坂田一郎**)。 ❻国際的に信頼性のある研究環境の構築を担うため、安全保障輸出管理支援室から改組された機関(室長=**岡部徹**)。 Ⓑ本部業務を行う室等からプロボストオフィス直下の機関に。 ❼GRIを試行的に導入するため、グローバル卓越人材招聘研究大学強化事業による教職員の受入れ支援を担う機関(室長=**横山順一**)。 ❽総長室総括委員会から改組された機関(委員長=**玄田有史**)。 ❾CROの下でリスク管理とコンプライアンス確保に関する業務の遂行に資するための機関(本部長=**桑原昌宏**)。 ❿他国に依存しないソブリン医療生成AI等の研究開発を推進し、臨床医療システムの課題解決を目指す機関(機構長=**喜連川優**)。事務担当は生産技術研究所。 ⓫住宅・都市の再生に係る技術と制度の革新を先導し、現代の住宅・都市が抱える諸課題の解決に資するための機関(センター長=**和泉洋人**)。 ⓬全学のリスク状況をモニタリングし、構成員の意識改革の取り組みを主導する事務組織(部長=**大久保伸一**)。 ⓭国際協創海外研究拠点の第1号拠点としてスウェーデンのカロリンスカ研究所内に設置された機関。事務担当は定量生命科学研究所。

※GRI=Global Research Integration

～シリーズ・ガバナンス改革～

最高リスク責任者として大学のリスクガバナンス改革を指揮

桑原昌宏CROに聞く

Chief Risk Officer

今年度、本学にCROという新しい役職が設置されました。全学のリスク管理を統括する初代CROに着任したのは、金融業界で長く活躍し、MUFGの執行役専務グループCROを務めた本学の卒業生。ガバナンス改革の一丁目一番地に挙げられるリスク管理体制整備の現状と今後の見通しについて、構成員へのメッセージとともに語っていただきました。

1986年に本学法学部を卒業後、三菱銀行に入行。常務執行役員欧州本部長等を経て、2019年よりMUFG執行役専務グループCRO。駒場では英語サークルのE.S.S.で活動し、本郷では日本法制史、国際私法のゼミをはじめ「人並みには勉強したつもりです」。

理事・CRO
桑原昌宏
KUWAHARA Masahiro

リスク管理を統括する責任者

――CROとはどんな職なのでしょうか。

たとえば、銀行が融資するか否かは支店が判断します。その業務に関して、融資に係るルール、格付制度を整備し、その浸透状況を確認し、銀行全体の融資ポートフォリオのモニター等を部下とともに行うのが金融機関のCROです。現場の個別の融資判断を審査するのも（後述の）2線の重要な仕事です。健全なリスクを取って運営する体制を整え、全体のリスクを把握して確認する。損失を招く人的エラーを減らすための対応が適切であるかどうかを確認する。組織のリスクを経営陣に報告し、個別戦略、リソース配分に係る提言等も行います。

――厳しい目が注がれる組織のCROを務めるリスクは感じませんでしたか。

報道で大変な状況にあることは知っていたので、果たして自分にできるのかと自問しましたが、少しでも東大のお役に立てるならと決心しました。金融機関とは違う種類のリスクが大学にはあり、財務リスクと非財務リスクに分けると後者が大きい。主に不祥事やその対応により評価が落ちるレピュテーションリスクも大きなテーマです。

――三線防衛についてご紹介ください。

企業では普及した考え方で、特に金融業界では浸透しています。第1線は現場。銀行なら各支店、大学なら各部局です。1線は、業務上で起こりうるリスクを想定・把握し、それに対応する役割を担います。第2線は、1線と別に位置し、1線のリスク管理状況を検証、支援します。リスクは管理しても実際に顕在化することがあります。1線の報告を受けて対応を一緒に考えるのが任務で、東大ではCROとリスク・コンプライアンス統括部が2線です。第3線は、リスク管理方針の遵守等をチェック・牽制する監査組織で、組織全体を見渡し、内部統制が機能しているかを確認するのが任務。東大では内部監査室が3線になります。

金融機関では社員が日常的に三線防衛を意識し、問題が生じれば報告を行い、深刻度に応じて対応します。1、2、3線が互いに牽制・協力して業務を行えるよう、三線防衛の考え方を東大式に導入するのが私の役割の一つです。

リスクに関する組織風土を醸成

そこで重要なのは健全なリスクカルチャーの醸成です。立派な仕組みを作っても、適切なカルチャーがないと機能しません。1線の皆さんには、自身がどんなリスクに対峙しているかを認識し、リスクオーナーシップを持っていただければと思います。日常業務の中でリスクを識別、評価し、何かあったときの対策を自ら考え、備えておくことが重要です。必要なときには、もちろん2線は最大限サポートします。巨大組織ではどこで何が起きているかの把握が困難なため、1線の人が声を上げることも大切です。リスクオーナーシップを持つことがリスク管理の極めて重要な要素であり、こうしたカルチャーが浸透した組織では、問題が大きくなる前に自浄作用が発揮されるはずです。

――東大のリスクカルチャーはどのように醸成していきますか。

様々な取り組みが必要です。まずは総長の部局キャラバンに私も随行し、対話を通じて状況を共有します。次にリスクに関する研修の実施。そして重要なのは、各々の組織単位のトップがリスク管理の重要さを言葉で発することです。意識と行動を変えようと地道に言い続けるしかありません。リスク・ポリシー等の内部ルールも、6月末を目処に順次策定すべく作業を進めています。三線防衛が機能するには全教職員の理解と協力が必須です。私は学部生としてしか大学に関わっておらず、大学のことは勉強中です。いろいろ教えてください。ともに東大をもっとよくしましょう。

◉改革実装の工程

4月8日 ガバナンス改革公表

		R8年6月 定例会見 ★	R8年9月 定例会見 ★	R8年12月 定例会見 ★	R9年3月 定例会見 ★
①	**リスク管理体制** 担当：桑原理事（リスク・コンプライアンス統括部）	リスク管理プロセス・危機対応ガイドラインの策定	改革案の実装		
②	**附属病院改革** 担当：相原理事、井上理事、南學医学部長、久米附属病院長代理（経営企画部、医学部事務部、附属病院事務部）	大学附属化等の規則改正、専門人材の配置等	改革案の実装		
③	**教員懲戒制度** 担当：山本理事（人事部）	改革案を実行するための制度設計の具体化	規則改正、実装		
④	**倫理意識の徹底** 担当：山本理事（人事部）	改革案の実装			
⑤	**社会連携講座等のチェック・管理** 担当：相原理事、岡部執行役（研究推進部）	改革案の実装			
⑥	**会議及び意思決定プロセス記録の整理** 担当：津田理事、山本理事（経営企画部）	改革案の実装			
⑦	**①～⑥のリスクコミュニケーション（学内）** 担当：桑原理事、大越執行役（リスク・コンプライアンス統括部、経営企画部、総務部）	改革案の実装 ※部局キャラバンについては部局ごとにタイミング・手法を確認のうえ実施			

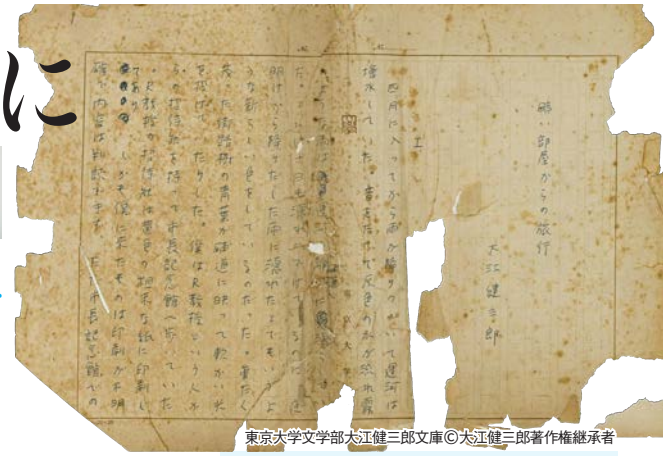
4月8日の総長記者会見で公表したガバナンス改革実装の工程表では、7つの側面から改革を進めることが示されました。その筆頭に挙げられているのが桑原CRO所掌のリスク管理体制。三線防衛体制を基本に、部局の自主性のみに委ねない全学視点でのガバナンス強化に主眼が置かれています。策定される危機管理ガイドラインにより全学の管理プロセスを整理し、深刻度が大きいインシデント発生時には総長を本部長とする危機対応本部を速やかに立ち上げて対応にあたります。改革の実装状況は外部有識者を含めた体制で継続的にモニタリングし、3か月ごとに検証・公表する予定です。

大江健三郎文庫に「新作」が登場

©森清／講談社

下宿先に預けた2篇が70年を経て世に

3月、人文社会系研究科・文学部が赤門総合研究棟で記者会見を行い、大江健三郎氏の未発表原稿2篇が発見されたと発表しました。約70年眠っていたノーベル賞作家の「新作」として注目の2篇について、大江文庫の運営を担当する阿部賢一先生に聞きました。


東京大学文学部大江健三郎文庫©大江健三郎著作権継承者

「暗い部屋からの旅行」
- ◉東京大学原稿用紙82枚（1～4枚目に欠損あり）
- ◉原稿末尾に「一九五五・五・十九」と記載あり
- ◉訂正、語順変更、語句挿入など多数あり
- ◉関連作：「火山」（1955年）→政治活動における死に言及）、『夜よゆるやかに歩め』（1959年）→大江作品には珍しい恋愛要素の打ち出し）、「水死」（2009年）→水死体への執着

誰も存在を知らなかった短編

3月にお披露目された未発表小説2篇は、どちらも初期の大江文学を理解する上で一級の資料です。発端は作家が学生時代に住んだ下宿の大家・加藤シノさんのご遺族から昨年11月に届いた1通のメールでした。

「祖母から預かった大江さん名義の原稿が家にあるので、確認してほしいとの打診でした。一般の人からこうした情報をいただくのは初めてでした」と大江文庫運営委員会委員長の阿部賢一先生。当初は半信半疑でしたが、やりとりを通じて原稿の枚数や日付の記載などの情報を得、スキャンされた原稿用紙も目にし、驚愕したそうです。

「大江さんは生前、未発表原稿は処分したと何度か語っていました。なのに、本人も研究者も言及したことがない作品が、しかもほぼ完全な状態で出てきたんです」

大江文庫には1.9万枚もの自筆原稿がありますが、未発表原稿はこれが初。12月にご家族と会って原稿用紙を預かり、ご寄託の意向を伝えられた阿部先生は、驚きとともに大きな責任を感じたといいます。

「せっかくお預けいただいても、しばらく人目につかない可能性もありました。どんな手続きを経てどういう形でこの貴重な遺産を共有すればよいのかと……」

原稿が本物だと確認するため、筆跡、保存状態、周辺情報などの検討を慎重に進めると、加藤さんと大江さんの交流を伝える雑誌記事やテレビ番組の存在が複数判明※。初期の著書の初版本奥付に記された著者の連絡先は、番地まで加藤家のものでした。調査結果を説明すると、著作権継承者側からは快諾の返事が届きました。

「なぜ大江さんは下宿の大家さんに原稿を預けたのか。推測の域を出ませんが、少なくとも二人の間には親しい交流があり、それが影響したのだとは言えるでしょう」

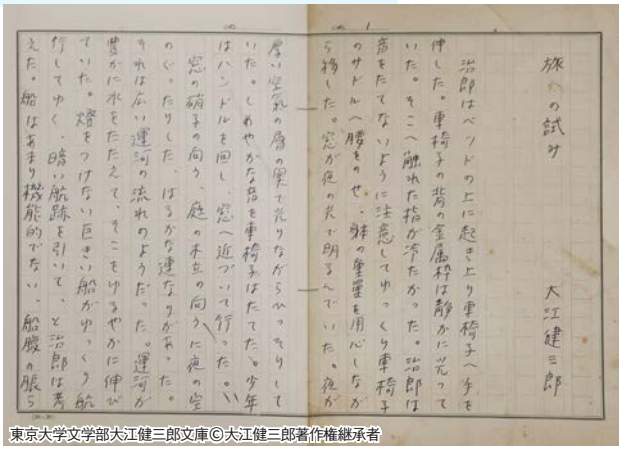
同時期の作品の習作だった？

駒場の2年生だった頃に書かれ、現存作品では最古の小説となる「**暗い部屋からの旅行**」（1955年）は、3部構成の短編。語り手である大学生の次郎、類人猿扱いされていると訴えるR教授、政治団体の殺人事件に巻き込まれるヒロ子の姿が、東京大学の名入り原稿用紙に綴られています。

「政治と微妙な距離感を保って政治に関わる人の衝動や閉塞感を描こうとする大江文学の特徴が窺えます。マッチョな学生運動全盛の時代に女性の視点を問いかけとして入れたアプローチはいま見ても斬新です」と阿部先生。文中に出てくる水死体は、大江ファンには「**水死**」を思い出させるもの。死者や声を出せない人々に強い関心を抱き、その声を受け止めようとする姿勢は、最初期の作品でもすでに示されていました。

「**旅への試み**」（1957年）は、代表作「**死者の奢り**」と同時期に書かれた短編。足が不自由な15歳の治郎が、看護婦の慰撫を機に車椅子で家出するも、道行く人から辱めを受け、母に見つかって戻され、家で看護婦に身を委ねるまでが描かれます。足が不自由な少年、空を運河に喩える比喩表現、結末の文言※など、短編「**他人の足**」と共通点が見られ、その習作の可能性は高いですが、両者には違いも多々あり。「一つの作品を書き上げてから別の作品を書き、そちらを選んだということ。作家がそういう書き方もしていたのかと思うと興味深いです。2024年度には「大江健三郎を読む」というオムニバス授業を行いました。学生も大江文庫の渦に巻き込んでいきたいですね」

「旅への試み」
- ◉原稿用紙42枚
- ◉原稿末尾に「一九五七・五」と記載あり
- ◉加筆・修正はほとんどなし（浄書原稿か）
- ◉関連作：「他人の足」（1957年）、「死者の奢り」（1959年）→死体のホルマリンプールに言及


東京大学文学部大江健三郎文庫©大江健三郎著作権継承者

大江文庫運営委員会委員長の阿部賢一先生（右）と、4月に文庫担当助教に着任したハビャン・ニーナ助教。大江文庫のアーカイブは利用登録をした研究者・学生が閲覧できます。
◉ https://oe.l.u-tokyo.ac.jp/top
※今回の2篇は雑誌『群像』（講談社）2026年4月号でも全文が読めます。

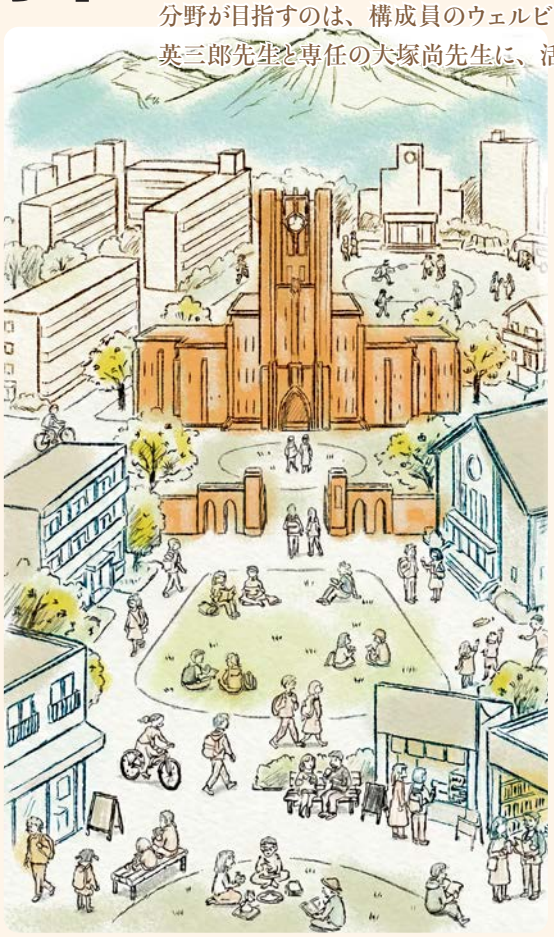
※『週刊現代』（1967年10月12日号）、NHK『私の秘密』（1963年）など　※「僕を清潔にしておきたいんだろ」「わかったわ」

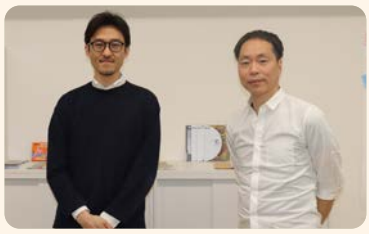
相談支援研究開発センターの新分野が掲げる

「キャンパスウェルビーイング」ってナンデスカ？

CAMPUS WELLBEING PROMOTION UNIT

2025年10月、相談支援研究開発センター内に「キャンパスウェルビーイング推進分野」が設立されました。学生相談所など既存の6部門に加わった新分野が目指すのは、構成員のウェルビーイングの向上です。分野長の田中英三郎先生と専任の大塚尚先生に、活動や今後の計画などを聞きました。





臨床心理士として学生相談所でカウンセリングを担当してきた大塚尚准教授（左）と、国際協力機構の専門家としてヨルダン保健省で青少年の精神保健政策アドバイザーを務めた経験を持つ田中英三郎教授（右）。学内に十分なスペースがなく、根津駅近くのビルに事務所を構えています。

心地よく、幸せなキャンパス

――そもそも「ウェルビーイング」とは何でしょうか？

田中　一言で定義するのは難しいのですが、平たく言えば「幸せ」や「心地よい状態」に近い概念です。これまで大学の相談支援は、悩みや不調を抱えて来る方々を「**マイナスからゼロへ戻す**」ことに力を注いできました。一方で、ポジティブな面に目を向けようというのがウェルビーイングです。「快」だと感じ、自分の人生に意味を見出せるといったポジティブな要素を増やしていければ、深刻な不調に陥りにくくなる。そこが出発点です。キャンパス全体として、そうした状態をどう育めるかを考えています。

大塚　学生相談所や保健センターでは、相談件数が頭打ちの状態で現場は逼迫しています。相談内容も複雑化、多様化しています。従来の個別相談で個人に寄り添い、サポートすることに加えて、4万人近い構成員全員のウェルビーイングを底上げする発想が必要だと考えました。UTokyo Compassの「誰もが来たくなるキャンパス」を一歩進めて「**誰もが来て良かったと思えるキャンパス**」を実現したいと考えています。

――本格始動から約半年間、どのような活動を行ってきましたか？

田中　まずは組織体制づくりです。学内外の研究者による有識者会議を立ち上げ、教育学、統計など多分野の知見をお借りしながら準備を進めています。全国、そして学内のウェルビーイングの実態を把握するための調査を計画しているほか、診断閾値下のうつ症状、あるいは症状がない人たちのレジリエンスを高めるアプリケーションベースの認知行動療法の提供も予定しています。これらの基盤となるウェブサイトも設計中です。学生主導の「Student Project」も立ち上げました。学生さんが自由に議論して、そこから活動や介入が生まれることを期待しています。メンバーは随時募集中です。

大塚　3月14日には設立記念公開シンポジウムを開催しました。活動紹介に加え、各相談施設に蓄積された実践知を共有し、参加者から多くの反響が寄せられました。家族型ロボット「LOVOT」体験や応用演劇などのイベントも行いました。また、情報の少なさから不適応を起こす留学生がいると聞き、留学生向けの情報提供動画も準備しています。

ゆるやかにつながれる環境を

大塚　学生さんからよく聞くのが「**居場所があるようでない**」という声です。アートなどを介して、立場を超えてフラットに交流できる場や偶然の出会いが生まれる場を作りたいです。6月の世界ウェルビーイング週間にもイベントを予定しています。

田中　ウェルビーイングの実現には、安全な環境の確保と、緩やかなつながりが欠かせません。本プロジェクトは4年間の時限付きです。その間に、環境を変えるような実験を実行・検証し、終了後も続けるべき施策については提言にまとめたいと考えています。学業や業績と同じくらいウェルビーイングが大切だという価値観を、東京大学から発信していきたいです。

2月に総合図書館で開催されたLOVOT交流会の様子。

昨年開催したStudent Project のワークショップ。キャンパスウェルビーイングの課題を考えました。

※上の絵は設立記念シンポジウムのポスターに使われたイラストです

教養教育の現場から

リベラル・アーツの風

第75回

東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

環境とエネルギーは一体として解決すべき課題に

／機構シンポジウム「環境とエネルギーの相剋と相溶―2050年に向けての展望―」

教養教育高度化機構
環境エネルギー科学特別部門
中崎城太郎

20年越しの認識変容の一翼に

――年に一度の教養教育高度化機構シンポジウムが、「環境とエネルギーの相克と相溶」をお題として3月9日に行われました。環境エネルギー分野の横断的な取り組みを総括するものだったそうですね。

「環境エネルギー科学特別部門の活動を総括するにあたり、部門長の瀬川浩司先生に加え、福士謙介先生、浅見泰司先生、沖大幹先生、江守正多先生、山田宏之先生と、各分野を代表する研究者が集結しました。いまや多様な分野の研究者が、それぞれの立場から環境とエネルギーを意識して研究に取り組む時代となっています。公開の討論の前に背景がまったく異なる研究者が集まった打ち合わせでは、「環境とエネルギー」という共通のテーマについて率直に意見が交わされました。そのなかで、自然と議論がかみ合っていったことが強く印象に残っています。20年ほど前には一般的だった、環境の改善がエネルギー供給の犠牲を伴う、あるいはその逆も然りとする捉え方ではなく、両者は同時に解決すべき課題であるという認識で自然に一致していったことに、確かな手応えを感じました。時代が確実に前へ進んできたこと、そしてこれまでの本部門の活動の意義を改めて実感する機会となりました」

――環境とエネルギーをめぐる認識は、どのように変わってきたと感じますか。

「前身であるNEDO新環境エネルギー科学創成特別部門がスタートした2007年当時は、再生可能エネルギーといっても「それは何ですか」と問われることが少なくありませんでした。しかし現在では、特別な説明を必要としないほど社会に浸透しています。環境とエネルギーが別々の課題ではなく、同じ問題として理解されるようになった点に、これまでの活動の大きな前進を感じています」

化学用語に込めた思いとは?

――タイトルの「相克と相溶」にはどんな思いが込められているのでしょうか。

「「相克」は比較的使われる言葉ですが、「相溶」は化学用語で、互いによく混ざり合うことを意味します。以前は、環境とエネルギーは相容れないものと考えられ、研究者同士がじっくり議論する機会も多くはありませんでした。いまは両者が一体となって課題に取り組むことが当たり前になりつつあります。その状況を表す言葉として、「相溶」はしっくりくると感じました」

――当日の講演・パネルディスカッションを通して、2050年の未来に向けて伝えたかったことは何でしょうか。

「シンポジウムでは、未来世代に重荷だけを背負わせたくない、という思いを登壇者全員で共有していました。課題は確かに重いですが、良い取り組みを評価する「加点型」の発想で進めていくことが、希望につながるのではないでしょうか。例えば地球温暖化対策というと、我慢や制約が強調されがちですが、環境・エネルギー問題の解決を通じて、より良い未来を実現できる、がんばれば良い未来がある――そうしたビジョンを若い世代に示すことが、いま研究者に求められていると考えています」

シンポジウムのポスター。当日の成果は採録集として後日出版の予定です。

◉シンポジウム講演者の顔ぶれ

福士謙介
未来ビジョン研究センター長

浅見泰司
大学総合教育研究センター長

沖 大幹
気候と社会連携研究機構長

江守正多
未来ビジョン研究センター

山田宏之
新エネルギー・産業技術総合開発機構

3人の講演者に部門客員教授の田中良先生も加わってパネル討論が行われました（司会は瀬川先生）。

会場となった教養学部13号館では、機構の各部門の活動を示すパネル展示も行われました（シンポジウムはオンラインとのハイブリッド形式での開催）。

◉教養教育高度化機構シンポジウムテーマの変遷（2014年以降）

2026	環境とエネルギーの相剋と相溶
2025	多様性と安全
2024	東京大学の Educational Transformation
2023	今、SDGs はどうなっているのか
2022	大学における社会連携による教育の可能性
2021	科学技術コミュニケーションの 16 年
2020	（コロナ禍の影響で中止）
2019	教養教育におけるグローバル化の新段階
2018	東京大学 初年次ゼミナールの軌跡と展望
2017	教養教育と自然科学
2016	教養教育とアクティブラーニング
2015	教養教育における社会連携と国際化
2014	初年次教育

機構の各部門が順番に企画・運営を担当して行う毎年1回のシンポジウム。各回のテーマは時代ごとに求められる教養教育の姿を映し出しています。

※所属等の表記は2026年3月時点でのものです。

UTokyo Brand Studio 実験中！

第4回

法学部3年　北田日奈子

二度目の武道館、決意を新たに

2026年4月13日、日本武道館にて東京大学および東京大学大学院の入学式が行われました。UTokyo Brand Studio学生スタッフとして現地へ赴き、新入生にインタビューを行いました。自分の入学式以来2年ぶりの武道館はとても懐かしく、新入生の期待と不安を浴びて初心にかえることができました。

毎年、創立記念日に行われる入学式。時季的に桜は今年も散っていましたが、満開のハナミズキと鮮やかな緑がいきいきとした新入生の面持ちを反映しているようでした。

今回のインタビューは、東京大学創立150周年を見据えたコミュニケーション・キャンペーン「Challengers for Changes」の企画の一環です。3月に行われた卒業式でのインタビューに引き続き、入学式においても参加している新入生に取材しました。

「東京大学に入学してチャレンジしたいことはなんですか？」

三者三様の回答をいただきました。「たくさん友達を作りたい」「進振りで希望の学部に行きたい」「アメフト部に入ってレギュラーをとりたい」「自分の持っている価値観と違う意見と積極的に触れ合っていきたい」「世界中をとりまく問題を解決する存在になりたい」……。特に印象に残ったのは、「自分のやりたいことを探していきたい」という回答です。進学選択制度を控え、入学後に自らの専門性を模索できる東大のリベラルアーツの精神が、彼らの自由な志に現れていると感じた瞬間でした。

新入生は皆、初々しく、期待に満ちた目をしていました。インタビューを通して自分が入学したときの気持ちを思い出しました。大学生活も折り返し地点を過ぎた今、初心に立ち帰る機会を得られたのは何よりの収穫です。悔いなくやりたいことに全力を注ぐ覚悟で過ごしていきたいと思います。

インタビューの様子は東京大学公式インスタグラムに掲載されています。ぜひ、ご覧ください。

https://www.instagram.com/utokyo_pr/

#WeChange Now

第19回　ジェンダー・エクイティ推進オフィス通信

男女別研究者活躍データの可視化と女性研究者の増加に向けて

2026年3月23日に、国際女性デーWebinarイベント「アカデミアにおける女性研究者の増加をめざして ―データから読み解く現状とその利活用 ―」を開催しました。ジェンダー・エクイティ推進オフィスでは、「UTokyo 男女⁺協働改革 #WeChange」事業の一環として、男女別研究者活躍データの可視化に、経営企画部IRデータ課と連携して取り組んできました。本イベントでは、先駆的にデータ可視化に取り組んでこられた、九州大学、東北大学から登壇者をお招きし、第一部では、本学も含めそれぞれの大学におけるデータ可視化の取組を報告し、第二部ではそれを踏まえたパネルディスカッションを行いました。関係者を含む117名が参加しました。

本イベントでは、ジェンダー不均衡の現状をデータを通して確認し、これを踏まえた女性研究者増加施策の取組状況が共有されました。また、男女別データの収集と可視化の効果について、DEI推進及び意思決定層への影響等が挙げられました。登壇者間で活発な意見交換が行われ、その後、参加者との質疑応答がありました。

なお、東京大学では、このたび、3つのセットでデータを公開しています。以前から公開していた、(1) 全学教員数（特定有期を含む）に加えて、(2) 部局別教員（特定有期を含む）、(3) 科研費の新規応募・新規採択の男女別データを新たにUTokyoウェブサイトのD&Iページにて公開しました。次のURLよりご覧ください。

https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/actions/diversity-inclusion.html

ワタシのオシゴト 第240回

RELAY COLUMN

本部総務課
評価チーム 山口真次

新天地にて法人評価のオシゴト

チームのみなさんに見守られながらの一枚

4月の異動により、総務課評価チームに配属となりました。これまで研究支援畑を歩んできましたが、現在は国立大学法人評価への対応を担当しています。着任以来、「第4期中期目標期間（令和4年度～令和9年度）」の4年目終了時評価に向けた報告書作成に取り組んでいます。報告書作成を通じて、東大の多様な活動が日々のみなさまのご尽力とご協力によって成り立っていることを改めて実感しています。不慣れな点も多く、チームのみなさんに温かく支えていただきながら（ご迷惑をお掛けしておりますが）、学びの多い日々を新鮮な気持ちで過ごしています。引き続き6月末の報告書提出に向けて、日夜奮闘していきます。

休日には、家族や友人と年に数回旅行することを楽しみにしています。先日は初めて広島を訪れ、お好み焼きやあなご飯、もみじ饅頭など、名物の数々を堪能しました。ごちそうさまでした！（旅先では、いつも食べてばかりです）

広島旅行、厳島神社の大鳥居が印象的でした

得意ワザ：素早いドアの開閉
自分の性格：頭は冷静で心は熱い（つもりです）
次回執筆者のご指名：平賀琢也さん
次回執筆者との関係：同期＋工学系NEDOラインのつながり
次回執筆者の紹介：キャプテンシーがあります！

専門知と地域をつなぐ架け橋に

FS Field Study レポート！

第43回

新領域創成科学研究科修士2年 山口絢弘

84枚のカードが紡ぐ新島の未来

青い海と様々な色の砂浜、そして世界唯一のコーガ石。東京から南へ約160kmに位置する新島が、私たちのフィールドだ。かつてはサーフィンの聖地として知られたこの島だが、私たちが直面したのは少し複雑な地域課題だった。新島村の未来を考える会議において、地域資源が体系的に整理されていないため、議論が発散しやすく、具体的な合意形成に至らないという課題があった。

そこで私たちは、漠然とした「新島の地域資源」をカードという形に落とし込み、最終的に84枚の「地域資源カード」を作成した。誰もが同じ情報を見ながら議論できるプラットフォームを構築し、未来に向けた議論を円滑に行えるようにすることが狙いだ。

船客待合所に展示された地域資源カード

初期のプロトタイプではカードに網羅的に情報を盛り込み、議論の土台となることを目指したが、それを用いたワークショップでは、議論中にカードの情報が読まれないという壁にぶつかった。そもそも島民の方々は島の地域資源の情報を把握しており、そこまでの情報は必要としていないのではないかという声をいくつもいただいた。こうしたワークショップでの生の声をもとに、試行錯誤の末、議論に必要な情報に絞った直感的なデザインへと磨き上げた。現地の方々の反応を見て軌道修正していく過程は、現場に出なければ得られない、FSの醍醐味だった。

カードを用いたワークショップの様子

最終の現地報告会では、新島港の展示スペースにカードを並べて展示し、完成版カードを使ったワークショップを行った。行き交う人々が足を止め、カードを組み合わせて新たな楽しみ方を探る姿や、日常の風景の価値を再発見して笑顔で語り合う姿を見たとき、胸が熱くなった。

正解のない問いに対し、対話を通じて共に答えを探る。温かくエネルギッシュな新島の人々と駆け抜けたこの1年は、私たちにとってかけがえのない財産だ。皆さんもぜひ、魅力あふれる新島へ足を運んでみてほしい。

フィールドスタディ型政策協働プログラム

●メンバーはほかに谷口優介、横田有映、和泉舞

インタープリターズ・バイブル 第225回

総合文化研究科 教授
科学技術コミュニケーション部門
梶谷真司

知の媒介者の存在意義

昨年3月に公刊した拙著『思想としての育児　知識と身体の歴史哲学』（教育評論社）で、私は「知の媒介者」という概念を提示した。それは、既存の専門知識を一般の人たちに向けて伝える人を指す。彼らがすることは啓蒙の一種ではあるが、自身は専門家ではなく、知識を新たに生み出さず、もっぱら専門知と民衆知をつなぐことに存在意義がある。ただし彼らは、たんに知識を右から左へ移しているだけではない。分かりやすく効果的に伝えることが重要で、さらにどのくらい広範囲に伝えられるかという固有の課題をもっている。

江戸時代、医療的観点から書かれた育児書はそれほど多くはない。香月牛山の『小児必要養育草（そだてぐさ）』（1703）が最も有名であり、他にも数冊あるが、それらはみな医者という専門家が書いたものである。他方、石田鼎貫という薬屋が書いた『小児養育金礎（こがねのいしずえ）』は、専門家ではない媒介者的な立場の人物によるものとして異色である。これは脾肝薬王圓という看板薬の能書を兼ねて無料で配布され、しかも文化10年（1813）から明治34年（1910）まで、百年近くにわたって何度も改訂を繰り返した。また薬王圓は、最盛期には北海道から九州にまで広まった。

『金礎』の記述は簡潔で分かりやすく、また諸々の病症に対する処方と結びつけて説明されている。つまり、読者の関心を惹きつけつつ書かれているのである。しかも書物が現代のように誰でもどこでも手に入れられなかった時代、薬と一緒に無料で配られた『金礎』は、おそらく明治以前に最も読まれた育児書だっただろう。知識の正確さや緻密さ、体系性を重視する専門家から見れば、粗雑でいい加減なところはある。しかし伝わってこその知識である。その点でこうした媒介者の存在は、あらためて評価する必要があるだろう。

石田家の看板薬脾肝薬王圓の引き札
（カリフォルニア大学サンフランシスコ校所蔵）

科学技術インタープリター養成プログラム

HCD編 ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第79回

ディベロップメントオフィス
シニアディレクター
庄司英里

ホームカミングデイ企画募集中

東京大学ホームカミングデイ（HCD、愛称：銀杏祭）10月17日（土）開催の準備が始まりました。企画参加募集も始まったばかりです、学内からの応募をお待ちしております！ 昨年は過去最高となる約1万人が来場、卒業生をはじめ、そのご家族や地域の方々、東大に関心をお持ちのみなさまが本郷キャンパスに集いました。今年はさらに規模を拡大し、より多くの方に東大の魅力を体感いただく場を目指します。

ホームカミングデイは年に一度、母校に卒業生が集まり懐かしく楽しい一日を過ごしてもらいたいという目的で始まりました。いまはオール東大の祭典として、「東大（＝我々）はなにをやっているのか？」を社会に、そして東大ファンのみなさんに広く発信し、共感と支援を得る重要なイベントとしても開催しています。研究発表から体験型ワークショップ、展示、フード提供まで、内容は自由自在。部局での参加はもちろん、研究室単位、趣味でつながる職場仲間、かつてのクラスメイト同士など、ゆるやかなつながりでの参加ももちろんOKです。それぞれの「東大らしさ」を活かした企画をお待ちしています。

今年の本部企画の目玉は「赤門瓦記名会」。「ひらけ！赤門プロジェクト」にご支援いただいたみなさまにご自身で瓦に名前をいれていただくプログラムです。瓦の枚数はなんと1000枚、多くの来場者が見込まれ、盛り上がること間違いありません。いまの仲間や懐かしい同期をお誘いあわせのうえ、駒場祭、五月祭に続く、東大ファンが楽しめる銀杏祭を一緒に盛り上げてください。まずは「ちょっとやってみようかな」というお気軽なお気持ちからのご参加も大歓迎です。

参加方法、詳細は本部ディベロップメントオフィスホームカミングデイ事務局まで。

hcd.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

東京大学ホームカミングデイ
https://u-tokyo-hcd.com

トピックス

全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles）に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
4月8日	本部環境安全課	第10回東京大学環境安全衛生スローガンコンテスト募集
4月12日	本部社会連携企画課	東京大学創立150周年まであと1年（総長メッセージ）
4月13日	本部総務課	令和8年度 東京大学学部入学式を挙行
4月13日	本部総務課	令和8年度 東京大学大学院入学式を挙行
4月14日	本部学術振興企画課、総合技術本部	第6回東京大学技術発表会を開催
4月14日	情報理工学系研究科	日仏情報学連携研究拠点（JFLI）協定更新調印式を開催
4月14日～	広報室	東大研究者 in 大阪・関西万博｜東大系建築 in 関西｜空気に笑いに食に水　関西企業とともに進める大型産学協創｜在留外国人、人権教育、民族学級……日本の多文化共生の源流は大阪にあり？＝髙谷 幸／広報誌『淡青』52号
4月16日	広報室	免疫の流れを変えて、花粉をブロックする＝森田直樹
4月21日	本部学生支援課	東京大学運動会の広告が京王井の頭線渋谷駅に掲載！
4月21日	本部総務課	ハワイ先住民族遺骨返還に関する訪問報告 - 対話と改善に向けて -
4月22日	本部渉外課	株式会社内田洋行とネーミングプランの協定を更新
4月22日	総合文化研究科・教養学部	総合文化研究科の大関准教授、髙木准教授が文部科学大臣表彰を受賞
4月22日	東京カレッジ	藤田誠卓越教授、フンボルト賞を受賞
4月24日	東京カレッジ	相田卓三 卓越教授がFrontiers Planet Prizeに選出
4月24日	本部総務課	本学が保管している沖縄県由来の人骨に関して
4月28日	本部コミュニケーション戦略課	令和8年春の紫綬褒章受章
4月29日	法学政治学研究科・法学部	川人貞史名誉教授が令和8年春叙勲 瑞宝重光章を受章
4月30日	本部コミュニケーション戦略課、ディベロップメントオフィス	山崎製パンとのコラボで学生のアイデアがランチパックに！
5月7日	生産技術研究所	生産技術研究所野村政宏教授、コウ シン特任准教授が文部科学大臣表彰受賞
5月7日	本部学生支援課	第78回東京大学・一橋大学対校競漕大会を開催！
5月11日	本部学生支援課	硬式野球部が東京六大学野球で9年ぶりの勝ち点を獲得！

CLOSE UP　第6回東京大学技術発表会を開催

（本部学術振興企画課、総合技術本部）

1日目に行われたパネルディスカッション

2日目に行われた口頭発表の様子

3月16日～17日に本郷キャンパス弥生地区で第6回東京大学技術発表会を開催しました。

16日は弥生講堂での開催で、藤井輝夫総長および齊藤延人理事・副学長の開会挨拶で始まり、北海道大学技術専門員の岡征子先生による特別講演「共用がつなぐ教育研究の未来 —北海道大学の研究基盤と技術職員が生み出す価値—」、北海道大学副学長・ITeCH本部長の網塚浩先生による講演「研究力を支える基盤と人材 —機器共用・技術支援強化政策の動向—」が行われました。続いて、「研究基盤整備における北大の先行事例と東大の挑戦 —技術職員がつなぐ未来—」と題したパネルディスカッションを行いました。北大から網塚先生と岡先生、本学からは岸利治執行役・副学長と本発表会実行委員長である医科学研究所の秦裕子シニアエキスパートが登壇。鈴木博之プリンシパルURAが進行を務めた議論では、技術職員組織の一元化、現場における課題、今後の方向性について意見交換がなされ、両大学共通の課題として、業務の偏在や人員配置、技術職員の貢献を可視化する評価指標の難しさなどが挙げられました。

17日は農学部講義室において計18題の口頭発表が行われました。終盤には技術業務データベースのグループ活動報告として、環境安全衛生グループ、電子顕微鏡グループ、機器共用グループが報告を行い、続いて総合討論を実施。活発な意見交換が行われ、今後の発展が期待される発表会となりました。

UTokyo　感謝を込めて贈る、チタンタンブラー

青空に美しく映える銀杏のデザインを施した、高級感溢れるタンブラー。チタンは保温・保冷に優れ、熱いものは熱く、冷たいものは冷たく保つことができます。 手にした時の重さは、驚くほど軽やか。また、落としても陶器のように割れたりしない強さもチタンの魅力です。桐箱に収められた気品ある姿は、父の日の贈り物や、自分自身へのプレゼントにも最適の一品です。

UTCCからのお知らせ

チタンタンブラー（桐箱入）　13,000円（税込）

→オンラインストア

CLOSE UP 硬式野球部が2017年以来となる勝ち点を獲得！ （本部学生支援課）

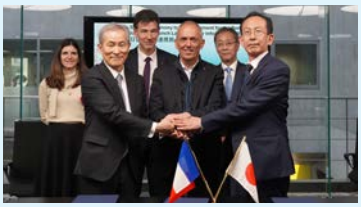
1回戦で完投勝利し雄叫びをあげる松本投手。昨秋に続く法大からの勝利で、自身としては神宮での3勝目となりました

5月9日～10日に明治神宮野球場において行われた東京六大学野球春季リーグ戦第4カード（対法政大学）において、本学硬式野球部は2連勝をおさめ、2017年秋季リーグ戦以来9年ぶりとなる勝ち点を獲得しました。

9日に行われた1回戦は、投げては松本慎之介投手（教育・3年）が9回126球1失点の完投、打っては7回に松本投手とバッテリーを組む明石健捕手（農・4年）の本塁打と樋口航介内野手（教養・2年）のタイムリーで逆転、2-1で法政大学に先勝しました。

10日の2回戦は、法政大学に初回から先制を許す苦しい立ち上がりになりましたが、東大打線が長谷川優外野手（教養・2年）の2ランホームランなど、2回から5回まで毎回得点を重ねて法政大学を突き放します。投手陣は法政大学の猛反撃を5投手の継投リレーで振り切り、最終回を池田剛志投手（教養・2年）が打者3人でピシャリと抑え、8-5で勝利しました。

CLOSE UP 日仏情報学連携研究拠点協定更新調印式を開催 （情報理工学系研究科）



前列左より、本学情報理工学系研究科長 中村宏、CNRS理事長 アントワーヌ・プティ、国立情報学研究所前所長 喜連川優の各氏

情報理工学系研究科が中心拠点となる日仏情報学連携研究拠点（Japanese-French Laboratory for Informatics／JFLI）の協定更新調印式が、4月1日、生産技術研究所で行われました。この調印式は、フランスのエマニュエル・マクロン大統領による同研究所視察（https://www.iis.u-tokyo.ac.jp/ja/news/5054/）に先立ち、フランスのフィリップ・バティスト高等教育・研究・宇宙大臣（写真／左から3人目）と本学の藤井輝夫総長（写真／右から2人目）の列席のもと執り行われました。JFLI参加機関であるフランス国立科学研究センター（CNRS）と国立情報学研究所、情報理工学系研究科の代表者らが集い、日仏の研究連携をより一層推進することを改めて確かめ合いました。

令和8年春の紫綬褒章受章

荒木尚志名誉教授（法学政治学研究科・法学部）、東山哲也教授（理学系研究科・理学部）、今橋映子教授（総合文化研究科・教養学部）、相澤清晴名誉教授（情報理工学系研究科）、高藪縁名誉教授（大気海洋研究所）が、令和8年春の紫綬褒章を受章しました。おめでとうございます。それぞれゆかりの深い先生が執筆した紹介記事については、全学ウェブサイトの「各賞受賞一覧」のページからご覧ください。

就任の挨拶

研究システムの高度化に向けて

このたび、副学長として国際卓越研究大学構想推進を担当することとなりました。本学の未来に関わる重要な責務を担うことに、身の引き締まる思いであります。

私は、1996年に本学工学部物理工学科を卒業し、2001年に工学系研究科物理工学専攻博士課程を修了しました。その後、慶應義塾大学で研究グループを立ち上げ、東北大学を経て、2018年より工学系研究科物理工学専攻に着任しました。スピントロニクス物理を中心とする量子物性物理学の研究に携わり、異なる大学・研究機関において、分野形成と若手研究者の育成に取り組んできました。

学術研究を取り巻く環境は、いま大きな転換点にあります。知の創出、共有、実装のあり方は急速に変化しつつあります。一方で、このような激動の時代においてこそ、大学には、短期的な変化に追随するのではなく、その変化を素早く知の創造へと転化しながら、学術の根幹を深め、未来の知の構造を構想し、新たな価値を社会へと拓いていく役割が求められています。

東京大学は、基礎研究から社会実装に至る幅広い知を蓄積し、世界に開かれた総合大学として発展してきました。国際卓越研究大学構想の推進は、本学の強みをさらに発展させ、学術研究の深化と活性化を実現するための重要な機会であると考えています。個々の研究者の独創的な発想を尊重しながら、部局や分野を越えた知の連携を促し、挑戦的な研究が持続的に生まれる研究システムを構築することが私の大きな使命であると認識しています。

教育研究の現場に学び、知的多様性と総合力を最大限に引き出し、次代の学術を切り拓く制度設計と環境整備に力を尽くしてまいります。

副学長
齊藤英治 SAITOH Eiji

平成8年3月　本学工学部学部卒業
平成10年3月　本学大学院工学系研究科物理工学専攻修士課程修了
平成13年3月　本学大学院工学系研究科物理工学専攻博士課程修了　博士（工学）
平成13年4月　慶應義塾大学理工学部物理学科　助手
平成18年4月　慶應義塾大学理工学部物理情報工学科　専任講師
平成21年4月　東北大学金属材料研究所　教授
平成24年4月　東北大学原子分子材料科学高等研究機構　教授
平成30年4月　本学大学院工学系研究科物理工学専攻　教授（現職）
令和5年12月　理化学研究所創発物性科学研究センター チームディレクター　兼任

専門分野：量子物理学・物性物理学
研究内容：1) K. Uchida , S. Takahashi , K. Harii , J. Ieda , W. Koshibae , K. Ando , S. Maekawa , E. Saitoh “Observation of the spin Seebeck effect” *Nature* 455 778-781 (2008)　2)齊藤英治『スピン流は科学を書き換える』集英社インターナショナル,2024

七徳堂鬼瓦

今後の地震学を変えるのは穴掘り技術?

昨年、東京大学地震研究所が創立百周年を迎えた。設立は関東大震災（1923年）の翌々年のことで、地震の被害を減らすためには地震現象の理解が必要であると痛感したからである。どこで地震が起き、なぜ地震が起き、地震が起きたらどうなるのかといった基礎的なことが、当時はほとんどわかっていなかった。どんな情報を得たら、地震の被害を減らすことができるのだろうか、その後の約百年間、多くの研究が続けられ、様々な知見を得てきた。

とりわけ「地震は断層の食い違い運動である」という震源像の発見は、その後の災害対策にも大きな影響を与えている。地震現象を数式で表現できるため、計算機上の仮想空間に地震を構築する手段を得たのである。それまで地震は岩石の破壊現象であるとされていたため、繰り返し試すことが困難であったが、条件を変えて何度でも再現することが可能になったのである。その結果、この百年間で、ゆれに耐えるために必要な設計、人々が安全に暮らすために必要な情報、地震に強い社会を作るために有効な手段、それらを科学的に考えられるようになった。

ここでは、次の百年間の地震学の発展を勝手に妄想してみた。地震には、まだ不明なことがたくさんある。例えば、次の大地震がいつどこで起きるのかは誰にもわからない。地震発生前にその断層がどんな状態にあるのか、その断層にかかる応力がどの程度なのか、それらがどのように変化していくのかを測れないからである。

そこで、深い穴を掘る技術の発展に私は期待したい。地震が発生するのは地下の深さ数km～数10kmと深く、その深さまで穴を掘る技術を人類は持っていない。断層の状態やその周辺の環境を直接把握する測定技術が必要である。そのような高温・高圧の環境下でも計測できる機器が発展して欲しい。断層面および断層周辺に適切に配置することで、地震発生前後の応力蓄積と応力開放および断層面での状態変化のすべてを把握することができる。測定データを定式化することで地震現象の理解が進み、計算機上に再現することができれば、次の大地震発生を予測することができるのではないだろうか。

ただし、新たなデータを取得すると、新たな現象を知ることになり、我々の想像を超えた新たな謎が待っているのかもしれないけれど。

酒井慎一
（情報学環）

Challengers for Changes
東京大学広報室
no.1606 2026年5月25日

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部コミュニケーション戦略課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp